

# 平成13年度学生による授業評価アンケートの 集計結果と総括

沖 陽子\*

## The Outline of Totaling Result of The Class Evaluation Questionnaire by Students in 2001

Yoko OKI\*

(Received November 30, 2002)

The committee of academic affairs of the Faculty of Environmental Science and Technology in 2001 planned and carried out "the class evaluation questionnaire survey by students" with original one. The committee has announced the totaling result of this survey, especially concerning both of the class evaluation and the self-estimation of student by themselves, in this paper. It is expected that these contents become the aid of the class improvement in near future.

*Key words: The class evaluation questionnaire, students, 2001, committee of academic affairs, outline of totaling result*

### 1 はじめに

本稿は、平成13年度環境理工学部教務委員会（環境数理工学科：中島惇委員、環境デザイン工学科：花村哲也委員、環境管理工学科：沖陽子委員、環境物質工学科：三浦嘉也委員、共通：諸川重剛委員、足立忠司評議委員、教務学生係）で審議、企画、実施した平成13年度前期・後期における「学生による授業評価アンケート」の集計結果をとりまとめ、公表するものである。当時、教務委員長に就いていた筆者が代表者として投稿するものであることをご了解頂きたい。

#### 1.1 学生による授業評価アンケートの導入及び結果公表に至った経緯

平成13年度以前も、学生による授業評価アンケートは5回実施されていた。しかし、教員の任意の参加であったため、アンケート実施の目的が達せられなかった。そこで、教育開発センター教育開発協議会FD専門委員会において新しい形の授業評価アンケート案が平成12年7月に提案され、教育実施・開発協議会合

同委員会と学部間で検討が幾度もなされた後、平成13年度前期から全学部で実施されることになった。このアンケートを実施する目的は、個々の授業の目標に照らして、授業が効果的に行われているかを、学生の立場から評価し、教員はその評価を参考にして授業の改善を図ることにある。また、結果の全面的な公開はせず、公開の可否並びにその範囲については各教育グループの判断に任せるという方針がとられた。従って、学部長の諮問を受けた教務委員会は、結果の公表を環境理工学部研究報告（学部紀要）に掲載することを決議した。さらに、アンケートは教養教育科目と専門教育科目の全授業科目について実施することとなったが、本学部では専門教育科目については、学生自身の自己評価の項目を加えた学部独自のアンケートも実施することを決定し、中島委員を中心に質問項目の検討を行った。その結果、前期においては、全学用と学部独自（講義科目用または実験・実習・演習科目用）の2種類、後期は全学の質問を取り込んで一本化した学部独自のアンケートを実施するに至った。アンケートの回答は全学用では学生番号を記入、学部独自のものは無記名とし、学生の自由意志の下に提出された。なお、自由記述式も同時に実施した。

\*岡山大学環境理工学部環境管理工学科, H13年度教務委員長

## 1.2 授業評価アンケート項目

前期の全学用アンケートの項目は下記の通りである。

- Q1 この科目の受講において、常に意欲的に取り組む努力をしたか。  
 Q2 担当教員の授業に対する熱意・意欲を感じたか。  
 Q3 教科書・参考書・資料等の配慮や準備は十分なされていたか。  
 Q4 授業の進め方（声・板書・教具使用・実験実習のデモ）は配慮されたか。  
 Q5 授業内容はシラバスに記載された到達目標に達するものであったか。  
 Q6 最終試験の実施方法を含めて、成績評価方法は妥当か。

以上の質問に対して評価は 5. そう感じる、4. どちらかと言えばそう感じる、3. どちらとも言えない、2. どちらかと言えばそう感じない、1. そう感じない、の 5 者択一のマークシート方式である。

Q7 授業の全体評価はどれになるか。

5. 非常に良かった、4. やや良かった、3. どちらとも言えない、2. やや悪かった、1. 非常に悪かった、の 5 段階の評価が課せられた。

一方、学部独自のアンケートは講義科目と実験・実習・演習科目に分けて実施した。項目は下記の通りである。

<授業に対する評価（講義科目）>

- Q1 シラバスの授業内容の記載は配慮されていたか。  
 Q2 授業の実施方法（教材・説明・板書等）は適切であったか。  
 Q3 授業により基礎的な理解や新しい知識の概念の教授を受けたか。  
 Q4 授業（内容、教官の熱意、受講者への対応の観点から）を総合的に評価。

<学生自身の自己評価（講義科目）>

- Q1 授業を何回欠席したか。  
 Q2 1回の授業に対して集中力は何分程度続いたか。  
 Q3 受講のために予習・復習を1回の授業当たり、どの程度の時間をかけたか。  
 Q4 レポート作成や宿題をどのようにやったか。  
 Q5 授業がわからないとき、どうしたか。  
 Q6 授業がわからなかった理由。  
 Q7 期末・中間試験の程度は、どの程度であったか。

以上の質問に対する評価は概ね全学用の回答と一致しているが、詳細は結果の図中に記載しているので、それを参照して頂きたい。なお、実験・実習・演習科目については、全学用と学部の講義科目用の項目に、さらに以下の項目を追加した。

<授業に対する評価>

- ・TA は、きめ細かに適切に教えてくれたか。
- ・安全性または施設・器具類の完備はどうであったか。

<学生自身の自己評価>

- ・この授業を受けたことにより、これに関連した講義

の内容が理解できるようになったか。

- ・習得したことは、将来に役立つか。
- ・身に付いたと思われる能力は何か。

一方、後期については、全学用の項目を学部用の項目に付加して整理することにより、授業に対する評価は 7 項目、学生自身の自己評価は 9 項目となった。

## 2 アンケート結果と分析

### 2.1 平成 13 年度前期アンケート

#### 2.1.1 回収率

今回の授業評価アンケートは以前のもとの質的に異なるものであることを、学生および教員にも十分に到達したが、残念ながら回収率は  $38.78 \pm 21.57\%$  と低かった。この値は全学で 4 番目の値であった。なお、今回、対象とした専門教育科目の総数は 98 科目、その中で実験・実習・演習科目は 12 科目であった。

#### 2.1.2 全学用の項目に関する集計結果

図1に専門教育科目 98 科目における項目別及び全項目の平均評点の実測度数分布を示した。全教員に各授業科目の質問項目毎の平均評点が送付されたと思うが、学部における全体像がこの図に相当する。それによると、項目 2 と 6 は評点 4 の範囲にモードをもち、項目 3、4、5 および全項目は評点 3 の範囲にモードをもち、項目 1 及び 7 は評点 3 と 4 の間で大差がない。すなわち、教員の授業に対する意欲と成績評価方法の妥当性は消極的ながら学生に評価されているが、その他の項目は「どちらとも言えない」との中途半端な評価に終わっている。学生自身の意欲と授業の全体評価は、どちらとも言えない学生とやや良いと思っている学生が同程度いるという状況である。ただ、声の大きさや板書などの授業の進め方について、不満を持っている学生がやや存在することは留意すべきである。

#### 2.1.3 学部用の項目に関する集計結果

「授業に対する評価」は全学用と重なる項目が多いので、後期結果の項でまとめて述べる。「学生自身の自己評価」に関わる項目の集計は図 2 に示した通りである。各評点の実測度数を全体に対する比率として円グラフで表した。図 2 によると、概ね真面目に授業に出席しているが、約 1 割の学生は欠席回数が多い。また、授業への集中力は、約 8 割程度の学生は、30 分から 1 時間強程度は続いているようだが、15%の学生は 30 分間も集中できないようである。さらに、1 授業当たりの予習・復習にかかる時間は 30 分以下が 6 割という、非常に問題のある結果が把握された。しかしながら、レポート作成や宿題は 85%の学生が人に聞きながらも自力で行っているようである。一方、授業で解らないことが生じた場合、友達に聞いて解決する学生は半数弱であるが、TA や先生に聞く学生は少なく、また 1 割程度は未解決のまま過ごしている。その解らなかった理由を問うと、自己責任組が 9%、板書や説明の仕

方に問題がある、またはレベルが高いと教員側に SOS を求める学生が 43%も存在した。しかしながら、期末試験等の水準は半数以上が妥当な問題と認識している。

学生自身の自己評価から「授業の集中力」が問題として挙がってきたので、集中力と授業の実施方法（教材・説明・板書等）との関係、及び授業の総合評価と

の関係を図3及び図4に表した。それらによると、実施方法が、かなりまたは非常に適切と評価した学生は集中時間も1時間以内から1時間以上に長くなる傾向が示され、かつ、良い授業と評価する学生は集中力が長く続くことも把握された。これらの現象は、授業改善の糸口になると思われる。

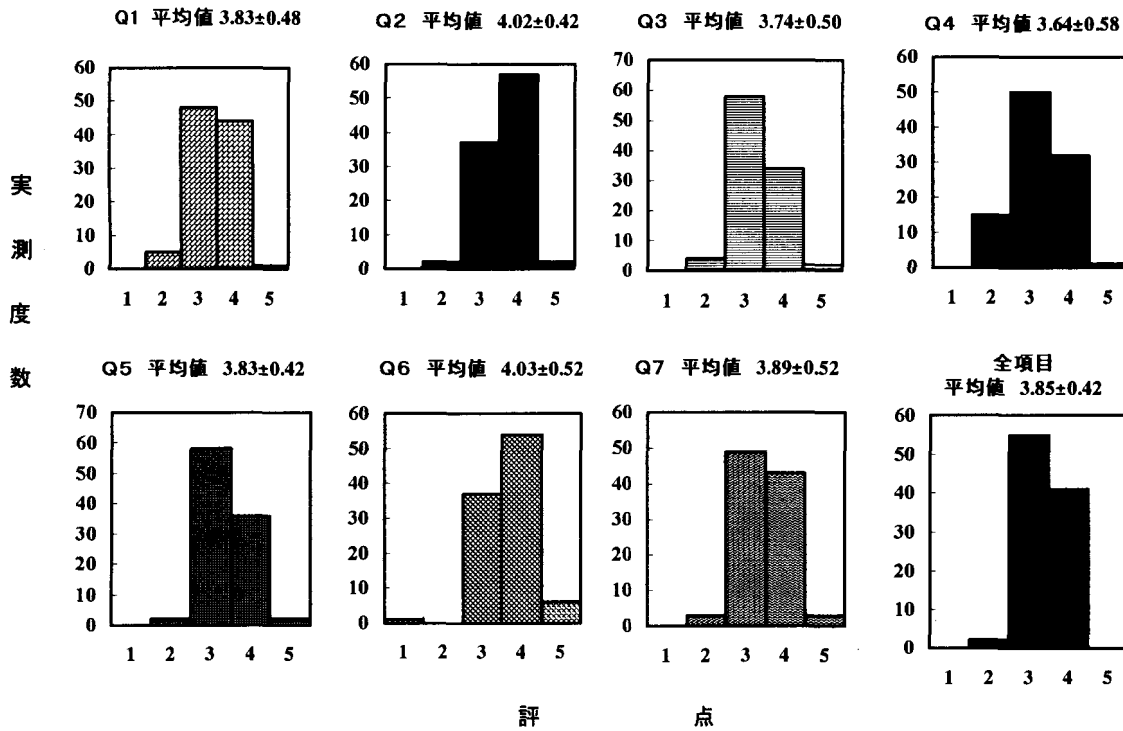


図1 前期全学用アンケートにおける項目別及び全項目の平均評点の実測度数分布

## 2.2 平成13年度後期アンケート

### 2.2.1 回収率

前期の回収率が思わしくなかったため、教務委員会としては回収方法等の検討を各教員に依頼した。その結果、平均回収率は43.78 ± 27.20%とやや上昇したが、回収率の度数分布を調べると、前期は50%未満が多数を占めていたが、後期は10~20%、40~50%、70~80%の3極化現象が表れ、教員の対処の仕方が垣間見られた。対象とした専門教育科目の総数は100科目、その中で実験・実習・演習科目は16科目であった。

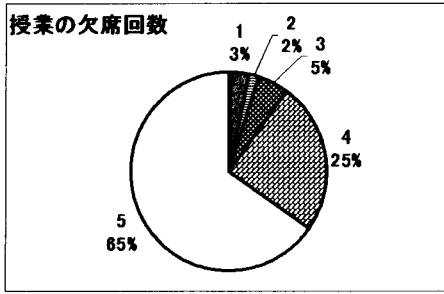
### 2.2.2 「授業に対する評価」に関する集計結果

図5によると、シラバスの授業内容の記載は、65%（前期：57%）の学生が配慮されていたと評価しており、「授業により基礎的な理解や新しい知識の教授を受けたか」の質問に対して、82%（前期：72%）の学生が何らかの知的刺激を受けたと評価している。他の項目は前期の全学用の項目に準じるが、比較すると、前期においては「3. どちらとも言えない」の比率が全体に

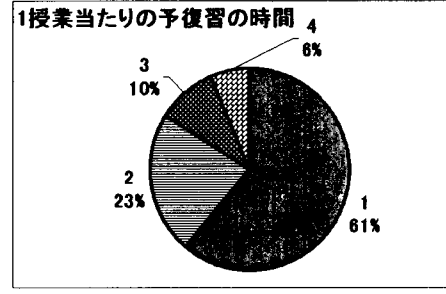
高く、最も評価の高い5.のランクが低い傾向にあった。しかし、後期は優柔不断な評価が少なくなり、5.の評価が高まった。特に、到達目標への達成、授業の実施方法、教科書や説明資料の配慮と準備は格段に評点が高くなった。これは、教員側の授業改善への姿勢と学生側の評価能力の向上によるものと推測したいが、いまだ結論は時期尚早であるかもしれない。

### 2.2.3 「学生自身の自己評価」に関する集計結果

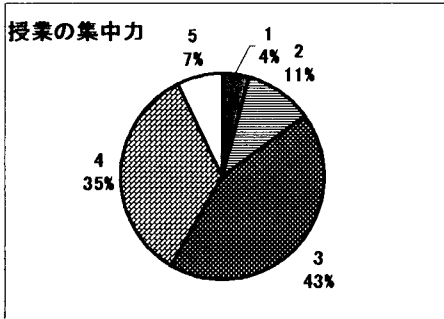
図6の後期の結果と前期の結果(図1・図2)を比較してみると、あまり評価に差が生じなかった項目は「授業の集中力」、「1 授業当たりの予習・復習時間」、「学生の意欲的な取り組み」、「レポート作成や宿題」及び「授業で解らない時」であった。評価が悪くなった項目は「授業の欠席回数」、評価が高くなった項目は「期末試験等のレベル」、「成績評価方法」及び「解らなかった理由」であった。解らなかった理由を板書や説明に因るものとしていた学生が減り、少しレベルが高いと判断するようになったこと、期末試験等のレベル及び成績評価方法が妥当と認める学生が多くなったことは特筆すべきことと考える。



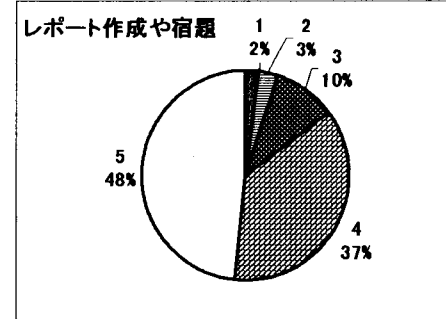
- 1 11回以上 2 6~10回 3 3~5回  
4 1~2回 5 0回



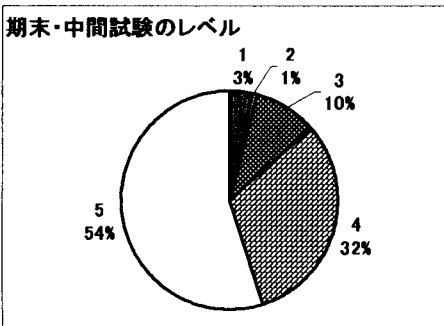
- 1 30分以下 2 1時間~30分 3 1時間30分~1時間  
4 2時間~1時間30分 5 2時間以上



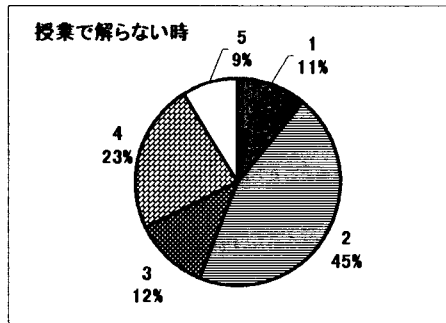
- 1 15分以下 2 30分~15分 3 1時間~30分  
4 1時間30分~1時間 5 全授業時間



- 1 宿題はほとんどやらなかった  
2 ほとんど他人のレポートを参照  
3 解らない箇所は他人のレポート参照  
4 解らない箇所は人に聞きながら自分でやった  
5 全部自分でやった



- 1 授業内容以外も出題・難しい  
2 授業内容に準拠・易すぎる  
3 授業内容に準拠・少し易しい  
4 授業内容に準拠・応用問題など難しい  
5 授業内容に準拠・正確に判定する問題



- 1 わからないまま 2 友達に聞いた  
3 先生やTAに聞いた 4 自分で解決できた  
5 解らないことはなかった

- 1 欠席・遅刻・居眠り  
2 板書や説明の仕方に問題  
3 総じてレベルが高かった  
4 少しレベルが高すぎた  
5 解らないことはなかった

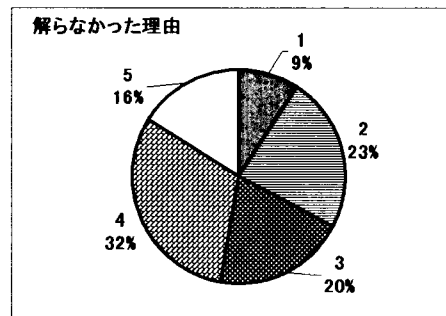


図2 前期学部用アンケートにおける「学生自身の自己評価」に関する評点の比率集計結果

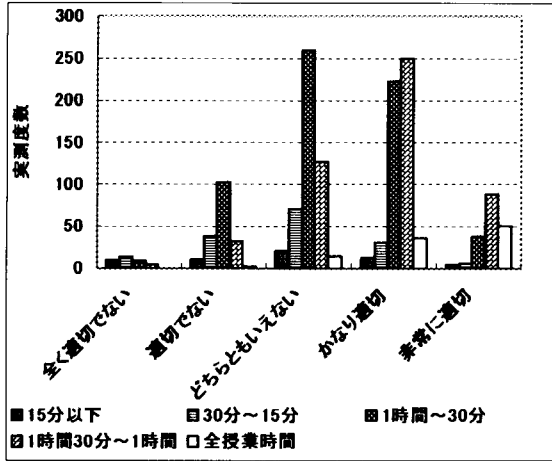


図3 授業の集中力と実施方法(教材・説明・板書等)との関係  
注) 前期アンケートより集計

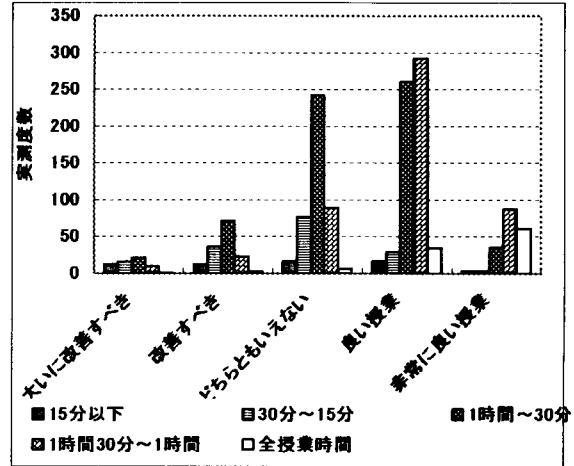
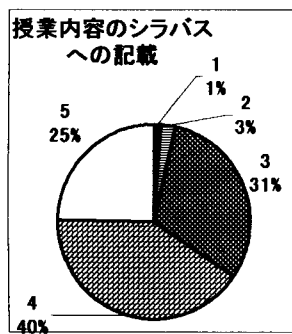
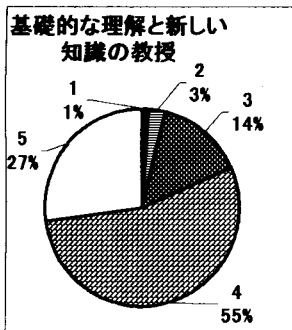
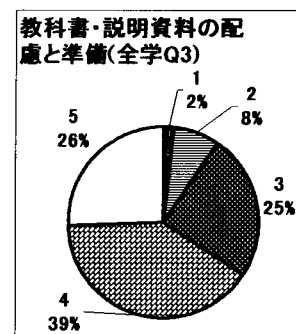


図4 授業の集中力と総合評価との関係  
注) 前期アンケートより集計



- 1 全く配慮されていない
- 2 配慮されていない
- 3 どちらともいえない
- 4 かなり配慮
- 5 十分配慮



- 1 難しく感じる
- 2 何も刺激を受けない
- 3 知的刺激をあまり受けなかった
- 4 知的刺激・少し受けた
- 5 知的刺激・大いに受けた

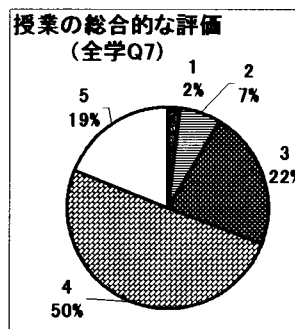
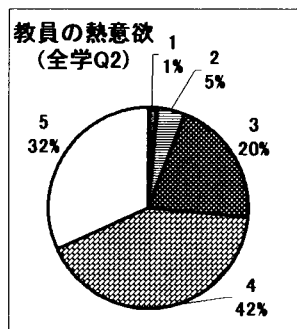
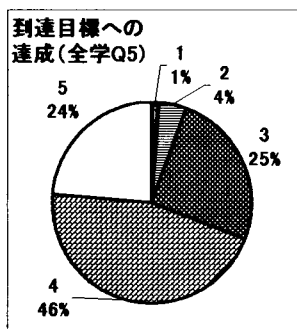
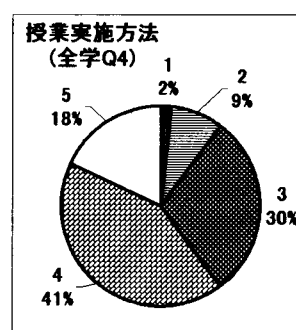


図5 後期学部用アンケートにおける「授業に対する評価」に関する評点の比率集計結果  
注) 全学Qの評点内容は2頁を参照

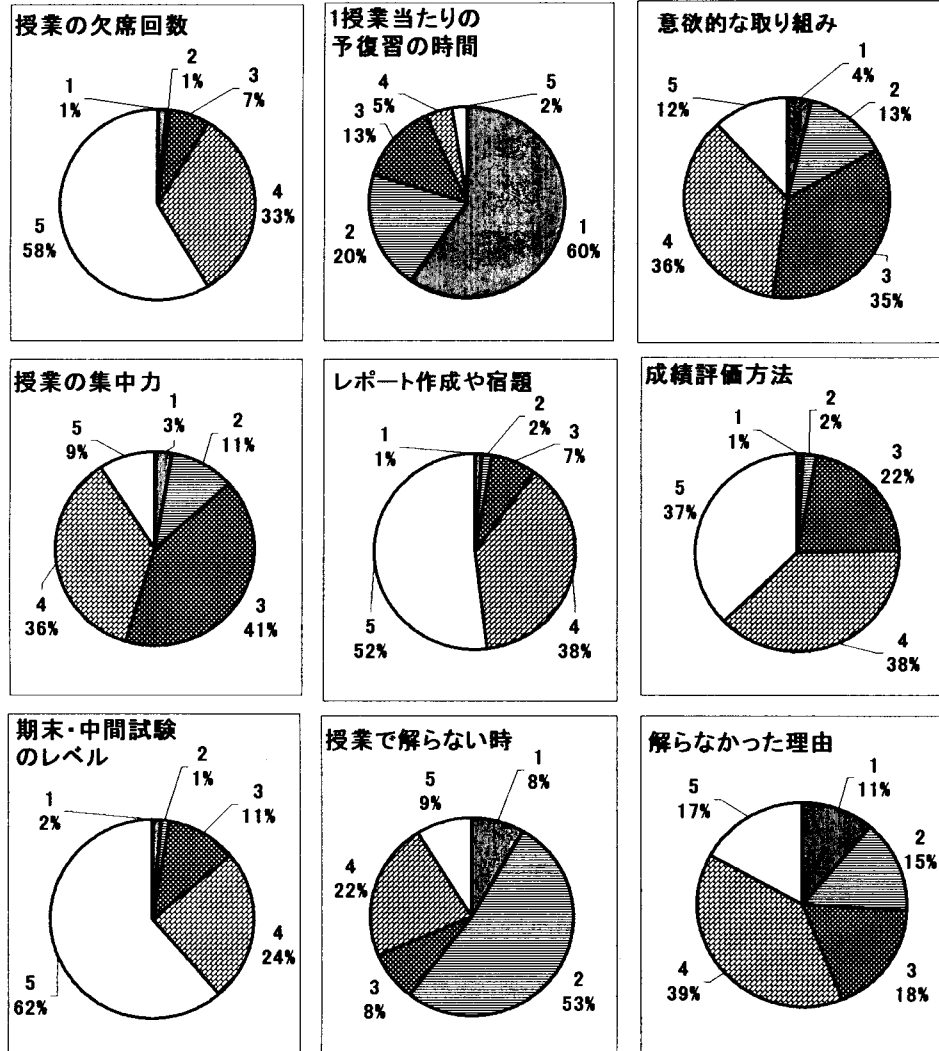


図6 後期学部用アンケートにおける「学生自身の自己評価」に関する評点の比率集計結果  
注) 評点の内容は図2を参照

### 3 総括並びに今後の課題

平成13年度に実施した前・後期の授業評価アンケート調査から、環境理工学部の平均的な学生像が浮き彫りにされた。授業時間外で、予習や復習に使う時間は30分以下、授業中の集中力が継続するのは30分から1時間強程度、授業は知的刺激を受けるが、レベルは少し高いと感じ、解らないことが生じた場合は、友達間でほぼ解決する。このような学生に対して、前期のアンケートによる学生の声に耳を傾け、資料や教具の準備、板書や説明の仕方、成績の評価方法等に工夫を凝らした教員がかなりおられたことと推察する。その結果、学生達もその行為に反応する気運が少しずつ芽生え、「どちらとも言えない」という曖昧な評価から脱しつつあるのではないだろうか。授業は教員と学生の双方からの歩み寄りにより改善されるもので、その手段として授業評価アンケートが活用されることは望

ましい。授業評価アンケートの結果はFDに利用するのみで、教員の教育業績評価のための資料としては使用しないという了解のもとに、全学のアンケートは実施されるに至ったが、今後、どのような動きになるかは予断を許さない。

一方、本学部ではJABEEプログラムの検討がなされているが、教育改善システムの評価が課せられており、授業評価アンケートの果たす役割はさらに大きくなるであろう。従って、今後、的確な評価結果を得るためにもアンケート項目の推敲、実施・回収・公表方法等のさらなる検討が望まれる。

謝辞：本学部独自の前期専門教育科目用アンケートの結果を整理するに当たり、環境数理学科垂水共之教授には、多大なご協力とご指導を賜った。ここに深甚なる謝意を表します。